木村長門守（十五卷）

帝キネ時代映畫

脚色者　小國比沙志
監督者　石山稔
撮影者　立花幹也
主演者　市川百々之助
紹介　第二百八十九號

史料と講談化された人物と更に其れを通俗化しやうとし乍ら、而も幾分史實的方面にも氣を措いてるのか此の作品の製作態度だ。隨つて隨所に見られる講談その他通俗讀物によつて豫備知識を持たされてゐる人物が現はれ、事件が起り、史實的な當時の世相を字幕で現はし等し乍ら、主人公長門守は濃淡交々の活躍振りを示す。長門に力點を置いてゐるかの樣で實は大阪城と德川との問題を重視したり時には關東關西の紛糾を叙してゐるかの樣で木村重成が突然現はれたりする。概して事件の焦點が狂ひ勝ちであつた。が少くとも此の多樣な事件を盛つたものを割合に手際よくコンデンスして居た石山監督の老巧さは賞めらるべきであると共に小國脚色者が長門のみの生涯では單調なる故にかくも多くの背景的事件を挿入せねばならなかつた苦心も買ふべきだ。が映畫的に是等の苦心や老巧さは大して價値のあるものではない。事件の變轉や破綻のない把握力は映畫として更にカメラを通じての好果をも必要とすべきであつた。カメラを通じての此の一篇は餘りに平面的でなかつたか？字幕の挿入によつて事件の變化や人物の性格を表現せねばならない程、映畫は端的な表現力しか持つてゐないとは思へない。文字以外に表はさるべき方法を多樣に持つてゐる筈である。カメラ自身としての撮影は美しかつたが、映畫價値としてのカメラ・アングルに缺けてゐた（カメラマンの罪ではない）そして此の一篇を最も効果あらしめたのは豐富なるキャストだけであつた。テーマとか表現とか以外に全帝キネの總てのスターを適所に用ひてゐた一事であつた。主演百々之助は役柄殊にふさはしく他の從演者たちによつて更に引立てられてゐた樣である。國德の且元、豐臣の家康最も出色、千草の淀君その他一般に女優に於ては甚だしく稚拙であつたのは惜しい。

興行價値——絶大。少しく冗長の感もあるが其のキャストと有名な題材だけでも充分に吸引力を持つてゐる。

——水町青磁——

（四月三日　大阪芦邊劇場、神戸相生座封切）